

早坂氏は力説していた。

「若い大学生や、女性を参加させたいね。このままだと後に引き継ぐ人がいない。バトンを渡せない。若い女性が来ると、必ず男は付いてくるから、若い女性を参加させるようにしたいね」と。また、

「瀬戸内海を音で表現したらどんな音だろう」
皆考え込み、誰も答えを出せなかった。

「ぼんぼん船の行き交うポン、ポン、ポンじゃないかなあ。今は聞けない音だね。今度ドラマで考えているんだ。誰かこの船の情報があつたら教えて」と。
またこんなことも言った。

「あなたの顔は瀬戸内の顔だね。直ぐ分かる。瀬戸内の顔は共通しているところがある。ぼちゃりまあるい。お嫁さんにするには瀬戸内の子が一番だ。優しくて、辛抱強くて、おとなしい。松山に転勤になって来た男性は、松山でお嫁さんを見つけて結婚して帰る人が多い。その人達は、たいがい幸せになっている」

私以外にも何人かの女性を指して、あなたも、あなたも、と言われた。

自分のまあるいおかめ顔に劣等感さえ持っていたが、先生にそう言われてみると、このおかめ顔が瀬戸内の顔なら開き直って好きになろうと思えるからおかしいと書いていた。そして先生もなるほど瀬戸内のお顔だわと。

二〇一一年は震災のあつた年で、花見のような浮かれた事は自粛しようと、桜祭りは取りやめていた。それでも七、八分咲きの桜は美しく、若者達はシートを広げて花見をしていた。

参加者は三十人弱で、会場も三卓のこじんまりした部屋だった。だからでもあつて、早坂氏と同卓という幸運に恵まれた。お元気そうで、黄色いスカーフがおしゃれだった。

早坂氏のお話は、郷土を愛し、郷土のために働きたい思いで溢れていた。高縄会に若い人達を連れてきて活性化させよう。ふるさとの北条も活性化させよう。鹿島を江ノ島のような場所にしよう。松山に来る観光客を美しい鹿島に連れてくるような方法を考えるように、新市長にも先日話してきた。

鹿島の上から高縄山を見たとき、高縄山の麓に菜の花で絵文字を浮き上がらせたい。図柄は河野の波模様にしたらどんなに美しいだろう。

現在北条には、若い世代が移り住んでいる。みんな美しい北条に住んだことを誇りに思っている。百人のボランティアも組織されて、北条を活性化させるために働こうとしている。瀬戸内海は、世界にも誇れる美しさと、美味しい魚が食べられる良いところ。この高縄会を活性化して、東京から郷土北条の活性化を後押ししていこう。来年は是非、あの美しい鹿島で鯛飯を食べる高縄会にしよう。みんなで北条に行こう。

森社長が、そのときには、北条の受け入れは、みんなが喜んでくれるように準備するから任せてくれと言ってくれた。そして翌年五月夢は実現した。

二〇一二年は、ちょうどこの日を待っていたかのような満開の桜。

三十四名の参加者のなか、初参加者六名で、大学院生や、私の甥三十五歳も